

神

奈良県・大和市にある山口獣医科病院。院長の山口武雄さんは、年間6000頭にも及ぶノラ猫の避妊手術を手がけ、しかも手術料は一律5000円と破格である。噂を聞いた人の中には、はるか遠くの千葉県印旛郡から、8匹ものノラ猫を連れてきた女性もいたそうだ。

まさに今、そのノラ猫の避妊手術の真っ最中の山口さんにその料金の安さの理由を聞いてみると「安くしないとノラ猫が減らないじゃない。ただそれだけだよ。保護した人だって、1万円以上の料金だ

と大変だけど5000円ならそう負担にもならないからね」と、実に明快な返事がかえってきた。ちなみに、山口獣医科病院のノラ猫や犬の治療費や入院費も、信じられないほど安い。

そのおかげ？ なのか、山口獣医科病院の入院動物の半分は、飼い主がいない猫や犬で占めている。

「とにかくね。飼い主がいない動物については、破格なのよ」と山口さん。余計なこととは思ったが、思わず「先生、病院経営の方は（大丈夫ですか）…」という「ははは。飼い主がいる場合は、

通常料金をちゃんともらっているからな。俺らが暮らしているのも動物のおかげなんだからそのくらいのことは当然だ」。

なんと度量の広い人なのか。山口さんは、この勢いで阪神・淡路大震災のときも神戸に行き、灘区の交通公園にテントをはり、約3か月半に渡って、被災した動物たちの診療にあたった。

「神戸の町は、爆弾が落ちたみたいなか況でね。建物という建物が壊れて、動物たちも悲惨だった。テントを臨時の診療室兼手術室にして、毎日動物たちの診療と手術をしましたよ。ミシンの下敷きになって、前足が壊死寸前になった猫も手術をして、なんとか助けたなあ。車の中も即席の手術室、俺らが寝るのもテントの中だったけど（笑）」。

こうした費用も一部の募金を除いてすべて自腹というから驚く。その理由も、「動物のおかげで暮らしているんだから、やらなくちゃ」なのだ。

山口さんの活動はこれだけではない。

ときには、どこかの雛鳥や田舎町でノラ猫が増えて困っているという話を聞けばかけつけて、車で巡回しながら避妊・去勢手術を行う。このパワーはいったいどこから湧き出るのか…。

病院の前に捨てられていた猫の正雄は今じゃ病院の看板猫

もともと、大学は畜産科に入り、獣医師を目指していた山口さんだが、在学中に友人に進められて獣医学科に入りなおしたという。獣医師になり、昭和49年に開業。今年で29年目に入る。

「獣医師になったころは、不幸な動物のことはあんまり考えていなかった。でも、こういう仕事をしていると、関わらないわけにはいけなくて、関わっているうちに歯止めがきかなくなってね」。

そんな話をしながら、院内を案内してくれる。都心の病院に比べるとかなり贅沢なスペースに、猫、犬、犬・猫混合入院室、伝染病専用入院室がある。猫の入院室に入ると、5〜6頭の猫がいつせい

赤ひげ先生 インタビュー

Interview by Mitsuyo Nishimiya
Photo by Noriyuki Hirayama



インタビュー
西宮三代
写真
平山法行

だつてさ。食べものがない、その上病気だなんて、生き物としてこんなにあわれなことがあるかい。だから食事や薬はいつでも提供できるようにしてあるんだ。

山口武雄



に「ニヤーン」と鳴き出した。手前のケージの黒猫は「レオ」という名前で、別の動物病院の前のドブにはまっていたところを助けられたらしい。

「見つけた人が、その病院で診てくれないから連れてきた。っていうからまいっちゃうよな。手術をしたけど足の神経がやられて、障害が残るから、この子は障害を持つ猫の仲間とところにいれてあげるよ。」

障害を持つ猫の仲間とは、山口さんが彼らに与えた専用スペースだ。交通事故で足がなかったり、片目が見えない猫たちが、思い思いに暮らしている。

続けてお隣の猫・犬混合入院室に入ると、アニマル・ヘルス・テクニシヤンの女性たちの笑い声が聞こえた。笑いの種は、床にちよこんとお座りしている、茶と白のミックスのオス猫だった。

「正雄は愛想ないからなあ。」

正雄というのがその猫の名前。この獣医さんが、草刈正雄からとってつけたそう。正雄は、病院の前にカゴに入られて仔猫と一緒に捨てられてたの。今じゃ、病院の看板猫よ」と山口さん。いわれてみれば、その猫はさつきから待合室のイスの上で、ピクリともせず寝ていた猫だ。しかも外来に来た大きな犬が、クンクン匂いをかいても全く動じない。愛想がなく、ゴロニヤンと人間に媚びないところに味があり、スタッフの人氣者になっっているそうだ。

犬・猫混合入院室には、「正」と書かれた正雄専用の部屋ももうけてある。正



1日約20頭の猫の避妊手術を手がける。

雄の飼い主を名乗る若い獣医師も存在するほどみんなに愛されている。正雄をかまっていると、慣れた白黒の猫がすり寄ってきた。この猫も引き取るといったはずの人が迎えに来ないため、迎えに来るまでここで暮らすという。

食へ物がなくて、病気。こんなにあわれなことがあるかい

「動物の食事だけは、かなりの量を備蓄してあるんだよ。見るかい？」

こういながら山口さんは、手術室の裏口から外に出た。病院のちょうど裏手になる敷地には、まるで動物園のような鉄製の檻があり、片方の前足がない土佐犬や足先の曲がった犬や老犬が暮らしていた。「この子たちは…」といいかけると「保健所にやってくれといわれたり、安楽死させてくれと頼まれた犬だよ。そんなことできないから、うちで飼って

るんだ」と山口さん。

片方の前足がない犬は、土佐犬を専門に繁殖している人の家でガンを発病。病気では繁殖犬として役目を果たさないことや、治療費が払えないという理由から、安楽死させてほしいと頼まれ、山口さんのところに来た。前足にできていたガンを取るために、切断手術をしたため、片方の前足が根元からない。「リユウ」という名の土佐犬は、山口さんの姿が見えると、3本足で立ちあがり、うれしそうにシッポをふった。

そのほかの犬たちも体のどこかに障害があるが、どの犬もひと目で純潔種とわかる犬たちだ。しかも、この子たちの元飼い主は、処分を頼んだあと、すでに次の犬を飼っているという。

「そういう話を聞くと、私は憤ってしまのですが…」と本音を漏らすと「獣医をしているとね。そんな話はゴマンと

あるよ。だけど、それを俺らがどうこういうわけにはいかない。だから難しいんだよなあ」といいながら、さらに犬舎の奥へ進む。法律上では、ペットは人の所有物だ。必要なくなれば、行政に頼んで殺処分してもとがめられない。

こんな悲しい現実と、常に背中あわせにいる獣医師たちの苦悩を思うと、なんともやりきれない気持ちになる。

犬舎の奥には、動物たちの食事が入ったダンボール箱がトタン屋根ギリギリまでぎっしりと積み上げられていた。見上げるほどの食事の量は約30t。

「入院している猫や犬や、飼い主がいらない動物たちのおまんまだよ。だつてさ。食べものがない、その上病気だなんて、同じ生き物としてこんなにあわれなことがあるかい。だから食事や薬はいつでも提供できるように、備蓄してあるの。」

この言葉には、ため息に似た返事をするのが精一杯だった。

「どうして、ここまでできるのか？」山口さんに会ってから、ずっと気になっていたことだ。

「どうして、ここまでできるのですか？」そう素直に聞いてみると「飼い主がいなくてことは、親がいないこととおんなじなんだ。同じ生き物として、かわいそう。だろ。それだけだよ」と笑った。

犬舎の隣りには「猫舎」なる猫の家があった。家の入り口には、いたずらっぽい猫のイラストと「主催、山口武雄・協賛、佐藤征典」などとかかかれている。こ

赤ひげ先生
インタビュー



Takeo Yamaguchi

神奈川県生まれ。日本大学農獣医学部
畜産学科を卒業後、獣医学科に入学。卒業後、
昭和49年に山口獣医科病院を開業。
不幸な動物を減らすための様々な活動で
全国的に知られている。
山口獣医科病院
神奈川県大和市桜森2-22-19 ☎0462-61-2669
診療時間 9:00~1:00、4:00~8:00 水曜午後休診



病院スタッフのみなさんと正雄。

これは、猫舎設立に協力した病院スタッフの名前だ。
入り口のホワイトボードには、猫舎で暮らす猫たちの名前があった。
「この子たちも正雄と同じ境遇だ。捨てられたり、保健所行きを頼まれたりね」。こうした猫を院内で飼うには頭数的に限界があるため、猫舎を設立したそう。片目がつぶれている猫は「源太郎」という名前がついている。「おーい、源太郎」と呼んでみると、源太郎は片方の目



自宅でも猫を飼っている山口さん。入院中の猫たちは、みんな慣れている。



見上げるほど備蓄してある猫や犬の食事。



里親探しの張り紙。自由に掲示できるようになっている。



愛想のないところが愛嬌の「正雄」



病院正面の動物供養塔。

これ以上不幸な動物が増えない
ために、避妊・去勢手術を...

をまるくしながら「ニヤッ」とかわい
声で返事をした。
山口さんは、近々、離島の猫の巡回避
妊・去勢手術を予定している。車に手術
台、薬品、機材を詰めこんで出かけ、手
術は、車の中や協力してくれる民家でや
ることになるとい。
「仔猫が増えて捨てられて、カラスの餌

になるという菌車は、人間が手を出して
やんまきや止められない。だから、仔猫
を増やさないように手術するんです。
世の中には「猫の避妊手術反対」とい
う意見もあるけれど、病気でよたよたに
なった仔猫がカラスの餌になる現場を目
の当たりにすれば、そんなこともいつて
られないでしょう。
また、飼いのない猫や犬が年間65
万頭も殺処分になっているという現実も
山口さんを手術にかりたてる要因だ。

「手術しなきゃ(不幸な猫が)減らない
じゃない。だから安くするの」という冒
頭の山口さんの言葉の裏には、ペットブ
ームの影に潜む悲しい現実には、立ち向か
おうとする強い意思があった。
取材がすむと「さあ、みんなで記念写
真だ」という山口さんのかけ声で、病院
スタッフが玄関に集まった。その中には
若い獣医師に抱かれた正雄の姿もある。
正雄の目に、山口さんはどんなふう
に映っているのだろうか。

【情報募集について】
あなたの近所の、ペットの医療
に情熱を燃やす人間味溢れる赤
ひげ先生をご紹介します。
採用分にはお礼を差し上げます。